

一般研究助成実施状況

仏教寺院・僧侶と研究者との協働による被災地コミュニティの復興：
東日本大震災・能登半島地震東北大学大学院 文学研究科宗教学専攻分野
特任助教 井川 裕寛

「復興」とは何か？

災害が起されば、まず道路や水道などのインフラを復旧し、壊れた住宅を再建する必要がある。仕事や学校を再開し、生活を立て直していくことも欠かせない。けれども、能登半島地震の被災地を歩き、人びとの話を聞くなかで、それだけでは捉えられないものがあると感じるようになった。災害によって失われるのは、建物や道路だけではないからである。

2024 年 1 月の能登半島地震は、人口減少と高齢化が進む地域を襲った。長く暮らしてきた集落を離れ、避難所や仮設住宅、あるいは能登の外へ移った人もいる。住む場所が変われば、それまで当たり前だった人間関係も変わる。近所の人と顔を合わせることに、道端で立ち話をする、祭りに集まること。普段は意識することもない「当たり前」のつながりが、実は地域の暮らしを支えていたことが、災害によって改めて見えてくる。

この研究を始めたとき、関心をもっていたのは、こうした地域のつながりの問題だった。寺院や僧侶は、災害後の地域社会でどのような役割を果たすことができるのか。日本各地に存在し、長く地域に根を張ってきた寺院を、一つの「社会資源」として捉えてみようと考えたのである。

実際に能登半島を訪ねてみると、寺院や僧侶の活動は、当初考えていたよりも幅広いものだった。避難所の支援や物資の提供だけではない。足湯を行ったり、お茶を飲む場を設けたり、



【仮設住宅での傾聴カフェ活動】

仮設住宅を訪れたりする。輪島では、移動図書館事業に際してお茶を飲めるサロンスペースが設けられ、本を借りるだけでなく、人と会い、話をする場所にもなっていた。

一見すると、こうした活動は道路や住宅の再建という意味での復興とは直接関係がないようにも見える。しかし、長い復興の時間のなかでは、人びとの暮らしや地域の文化を支える重要な役割を果たしている。

もちろん、失われたものをすべて元に戻すことはできない。それでも人びとは、残されたものを手がかりに、新しい暮らしをつくっていく。能登での調査を続けるうちに、復興とは「元に戻す」ことだけではなく、災害によって損なわれた人と人、人と地域との関係をつくり直していく過程でもあるのではないかと考えるようになった。

被災した寺院を拠点として



【石川県穴水町・海臨山千手院】

能登半島地震では、多くの寺院も被害を受けた。私が調査で訪れている石川県穴水町の千手院もその一つである。

千手院は、穴水湾を望む高野山真言宗の寺院である。地震による倒壊は免れたものの、もともと10年ほど無住の状態が続いており、堂宇の傷みも進んでいた。震災後、この寺をもう一度地域に開こうと動き始めたのが、地元のNPO法人「チーム能登喰いしん坊」であった。

最初に行われたのは、寺の片付けだった。地域の人だけでなく、NPO・NGO、寺院関係者、学生などが作業に加わり、これまでに千人を超える人が千手院を訪れたという。被災した寺を直すための作業が、地域の内外から人を呼び込むことにもなった。

2024年8月には、震災の犠牲者を追悼し、地域の復興を願う「復興の灯」が開かれた。かつて行われていた万灯会を復活させたものである。地元住民や各地から訪れたボランティアが集まり、読経の後、それぞれの思いを託したスカイランタンが夜空に上がった。

千手院の取り組みで興味深いのは、寺を震災前の状態に戻すことだけが目指されているわけではない点である。震災以前から構想されていた能登の巡礼や、地域文化を伝える取り組みとも結びつけながら、地域の人びとだけでなく、能登を訪れる人にも開かれた場所にしようとしている。

実際、千手院には、地元住民や僧侶だけでなく、それまで必ずしも接点のなかったさまざまな人が関わるようになった。被災した寺院そのものが、人びとの協働を生み出す場になっているのである。

この取り組みは、研究を始めた当初に考えていた「社会資源としての寺院」という見

方を広げてくれた。災害時の寺院というと、避難場所や物資の集積場所として建物や敷地を活用することがまず考えられる。しかし千手院で目にしたのは、寺院が被災し、再建されていく過程そのものが、地域内外から人を呼び込み、新たな活動を生み出していく姿であった。

「支援」から「支縁」へ

能登の仮設住宅などでは、僧侶を含む宗教者らによる傾聴カフェが開かれている。私が訪れた穴水町のカフェでは、仮設住宅の住民がお茶を飲みながら談笑していた。何度か通ううちに、仮設住宅で初めて会った人とも話せるようになったという人もいた。カフェの看板に書かれていたのは、「ホッと居て」という言葉だった。何か特別なことをするというより、まずはそこに来て、「ホッと」できる時間をつくる。そのこと自体に意味があるのだろう。

輪島では、仏教系 NGO のシャンティ国際ボランティア会が、輪島市立図書館と協力して移動図書館を運営していた。本を載せた車で仮設住宅などを巡り、本の貸し出しと一緒にお茶を飲める場所を設ける。本を借りに来た人が知り合いと再会し、そのまま話し込むこともある。本を届けることが、人と人が再び会うきっかけにもなっている。



【輪島市立図書館に寄贈された移動図書館車】

こうした活動を見ていると、「支援」という言葉だけでは、うまく捉えきれないものがあるように思う。「支援」という言葉からは、ともすると支える人と支えられる人という関係を思い浮かべる。しかし、被災地で実際に起きていることは、それほど一方向ではない。支援に来た人が地域の人から教えられることもあれば、何度も通ううちに顔見知りになることもある。外から来た人との出会いが、新しい関係へとつながることもある。そして、私たち研究者もまた、その関係の外側にいるわけではない。

私は、こうした関わりを「支縁」という言葉で捉えてみたいと考えている。災害によって離れたり、途切れたりした人と人との縁を、さまざまな活動を通して結び直していくこと。そして、震災後の出会いから、それまでになかった新しい縁が生まれていくこと。「支縁」には、その両方の意味を込めている。

傾聴カフェも、移動図書館も、それだけで住宅を再建したり、人口減少を止めたりできるわけではない。それでも、そこに人が集まり、言葉を交わし、また会うきっかけができる。その積み重ねもまた、長い復興の一部なのだと思う。

東日本大震災から能登、そして熊本へ

能登で宗教者による支援活動を調査していると、そこには東日本大震災から続く経験の蓄積があることに気づく。

2011年の東日本大震災では、多くの宗教者が被災地に入り、物資支援や炊き出し、追悼、傾聴など、さまざまな活動に携わった。宗派や教団を越えた連携も生まれ、その経験はその後の災害にも引き継がれてきた。

先に触れた傾聴カフェの源流となる「カフェ・デ・モンク」は、東日本大震災を契機に始まった。その後、2016年の熊本地震や2018年の西日本豪雨などでも活動が行われ、能登でも、そして2026年の熊本地震でも被災した人びとを訪ねている。東日本大震災で始まった取り組みが、それぞれの被災地に合わせて形を変えながら、十数年にわたって受け継がれてきたのである。



【2026年熊本地震と「Cafe de Monk」】

私自身、東日本大震災後の宗教者による支援活動を研究するとともに、臨床宗教師（布教や宗教活動を目的とせず、心のケアを行う宗教者）として支援活動に関わってきた。能登を訪ねると、東北で出会った宗教者や支援者たちと顔を合わせることがある。十数年前につくられたつながりが、今も生きていることを実感する。

もちろん、過去の災害で行われたことを、そのまま次の被災地に持ち込めばよいわけではない。地域によって歴史も文化も、抱えている課題も異なる。それでも、何ができ、何ができなかったのかという経験は、次の災害に向き合うときの手がかりになる。

こうして考えると、「支縁」は一つの被災地のなかだけで完結するものではない。被災地で生まれた縁そのものが、次の災害へとつながっていくこともある。東日本大震災から熊本、能登、そして再び熊本へ。災害を越えて人びとがつながり、経験が受け継がれていく。

復興とは、失われたものを元に戻すことだけではない。災害によって途切れた縁を結び直し、ときには新しい縁をつくりながら、その土地での暮らしをもう一度つくっていくことでもある。これからも被災地を訪ねながら、災害を越えてつながっていく「支縁」の姿を記録していきたい。

助成年度 2025～2026年度

助成種類 一般研究助成

研究課題 仏教寺院・僧侶と研究者との協働による被災地コミュニティの復興：東日本大震災・能登半島地震